

氏名（本籍）	西村 三郎（高知県）		
学位の種類	博士（体育科学）		
学位記番号	博甲第	9632	号
学位授与年月	令和 2 年 4 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	高等学校の短距離走の体育授業における疾走能力 に応じた指導に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士（体育科学）	木塚 朝博
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	澤江 幸則
副査	筑波大学教授	博士（体育科学）	深澤 浩洋
副査	筑波大学助教	博士（体育科学）	木越 清信
副査	日本体育大学教授	博士（教育学）	岡出 美則

## 論文の内容の要旨

西村三郎氏の博士学位論文は、男子高校生を対象に、疾走能力に応じた技術的課題を検討し、実際の体育授業においてそれらを指導した際の学習成果について検証したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文で著者が着目したのは、体育授業における男子高校生を対象とした短距離走の指導に関するこれまでの研究では、男子高校生は疾走能力の個人差が大きいにも関わらず、指導にあたってそのような学習者間の疾走能力差が考慮されていなかった点である。このような課題に取り組むことは、学習者個々の疾走能力に応じた適切な指導を可能とすることに加え、それによって短距離疾走能力は生得的な能力であり指導によって向上しないと思込んでいる生徒や教師が持つ認識を改めることに貢献すると考えられる。

上記の観点から本論文では、短距離走の中間疾走局面を対象とし、男子高校生の疾走能力に応じた指導の学習成果について明らかにすることを目的としている。特に、疾走能力に応じた技術的課題、それらの技術的課題を改善するための教材づくり、実際の体育授業における学習成果という 3 つの観点を中心として、以下の 3 つの研究課題が実施されている。

まず、研究課題 I（第 4 章）では、疾走能力に応じた技術的課題を検討している。具体的には、一般的な男子高校生を疾走能力によって、疾走能力の高い上位群、平均的な疾走能力を有する中位群、疾走能力の低い下位群の 3 群に分類し、50m 走における中間疾走局面の疾走動作を比較することで疾走能力に応じた技術的課題を検討している。その結果、中位群と下位群に共通する技術的課題として、遊脚の膝関節を離地後素早く屈曲し遊脚を前方に引き出すこと、遊脚の大腿を高く上げることを指摘している。また、中位群固有の技術的課題として、支持脚の膝関節の屈曲を抑えること、支持期前期に体幹を過度に前傾させないことを指摘している。さらに、下位群固有の技術的課題として、下腿を前方に振り出さず接地すること、前足部で接地し足関節を伸展させないことを指摘している。以上の 3 種類の技術的課題が明らかになったことで、学習者の疾走能力に応じて指導すべき技術的課題をより適切に選択できると主張している。

続く研究課題Ⅱ（第5章）では、研究課題Ⅰで明らかにした疾走能力に応じた技術的課題を改善するための教材を考案することを目的としている。研究課題Ⅰで明らかになった3種類の技術的課題を改善するための教材を考案し、それらの教材を用いて全4回の指導を行い、指導前後の対象者の50m走における中間疾走局面の疾走速度、疾走動作を分析することで、教材の学習成果を検証している。また、指導に際しては、実際の体育授業では時間的な制約や学習者の動機づけなど様々な要因が学習成果に影響を与えることを考慮して、体育授業外で少人数指導を行っている。その結果、考案した3種類の教材全てにおいて、50m走における中間疾走局面の疾走速度や各教材で改善を意図した技術的課題に改善が見られたことを報告している。以上のことから、本研究課題で考案した技術的課題は、疾走能力および疾走能力に応じた技術的課題の改善に有効であると主張している。

そして、研究課題Ⅲ（第6章）では、実際の体育授業における疾走能力に応じた指導の学習成果を検証している。体育授業において研究課題Ⅱの教材を用いて指導するにあたって、全6時間の単元計画を立案し、単元前半では共通の技術的課題の改善を意図した教材を用いて指導を行い、単元後半では疾走能力に応じた固有の技術的課題を改善するための教材を用いて、対象者を疾走能力に応じて中位群と下位群に分けて指導を行っている。なお、各教材を実施する際には、指導方略としてピアティーチングを取り入れ、学習者が2人組となって互いにフィードバックを与え合い、より対象者が適切に教材を利用できるよう配慮している。その結果、中位群、下位群ともに単元後には、改善を意図した中間疾走局面の疾走速度が増加していたこと、疾走動作に関しては中位群、下位群ともに単元前半に取り組んだ共通の技術的課題に関しては改善が見られなかったものの、単元後半に取り組んだ固有の技術的課題には改善が見られたことを報告している。以上のことから、実際の体育授業においても、短距離疾走能力に応じた技術的課題の改善を通じた疾走能力の向上が可能であると主張している。一方で、研究課題Ⅱの結果との比較から、実際の体育授業においては複数の技術的課題の改善に取り組む場合にはより多くの時間数が必要となることや、授業内で用いたピアティーチングをより適切に機能させることが課題として残されていることも記述している。

本論文では、以上の3段階の研究を通して、男子高校生を対象とした疾走能力に応じた指導の学習成果について論じている。また、これらの研究の結果から著者は、指導内容としての具体的な疾走動作を提示できたことや、特定の疾走動作を改善するための教材を考案できたことを研究の意義としている。

#### 審査の結果の要旨

##### （批評）

本論文では、疾走能力差の大きい男子高校生が疾走能力に応じてどのような技術的課題を有しているのか、また、それらを改善するための教材を考案し、実際の体育授業における学習成果を明らかにしている。詳細な分析に基づき、疾走能力に応じた技術的課題を明らかにした点は新規性が高く、それらを改善するための教材を考案したことは、短距離走の学習や指導を行う際の有意義な資料となることが期待される。

以上のことから本論文は、学術的に意義深いだけでなく、体育授業における学習や指導場面にも貢献するとの観点から高く評価できる。

令和2年3月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。